

へびについてⅠⅡⅢ

安部公房

出典 『砂漠の思想』所収
講談社文芸文庫
400字詰原稿用紙33枚

へびについて I

——常識について——

へび年に、へびのことを書いたりするのは、まったく陳腐ちんぷな思いつきである。しかし、陳腐から目をそむけてしまうのは、もつと陳腐だ。そこで私も、多少意地になり、「へび、ながすぎる」とルナールのしゃれた文句もんぐを想出したりしながら、なんとかへびをこなしてやろうと、身構える。メズサの頭のへび、イヴを誘惑したへび、ツアラ・トゥ・ストラのへび、童話の白いへびの精、テセウスの退治した翼のあるへび、ヤマタのオロチ、アンリ・ルツソーのへびつかいの絵、それから家の精と考えられている青大将や、私の友人のものすごいへび嫌いのことなどを、まったくへびにふさわしいのらりくらりした連想でたどってみるうちに、結局これも常識的な結論だが、やはりへびがなぜそんなに不気味なのか、その理由について考えてみよう

いうことに辿りついた。

考えてみればヘビに関するこの不合理な恐怖心は、中学生のころからその不合理性のゆえに、私を悩ましつづけたものだった。ヘビのもつ不気味さは、単なる恐ろしきとはちがひ、なんとも奇妙なものである。もつともヘビに平気な人もあり、そういう人はふつう変態的だと考えられている。ヘビの不気味さは、たしかに猛獣の物理的恐怖に比して、すこぶる生理的だということが言えるだろう。だがそれは単に「ヌラヌラ」という形容で示される類似性だけで説明されるべきでない。「ヌラヌラ」だけなら山芋だって、カエルだって同じことだ。それに、実際ヘビにさわったことのある人の説によると、ヘビの肌は決してそんなにヌラヌラなんぞでないようだ。「ヌラヌラ」の共通説は、ヘビとセックスとの物神崇拜的な結合から、逆に推論された心情的概念ではないのか。ヘビの生理的な不気味さは、決して視覚的なアナロジーだけにとめるべきでなく、かえって人間の中に残っている原始的な部分、すなわち物神崇拜の不合理な、レヴィ・ブルユルの言葉を借りればプレ・ロジックの部分に求められるべきかもしれない。あるいはさらにさかのぼって、人間以前の時代の生活形態、多分そろそろ不自由になりはじめた半樹上生活時代にもとめるべきだろうか。ヘビにおびえる小鳥の姿は印象的である。その生活機能からみて、樹上生活者にヘビがいかに恐ろしかったか想像に難くない。

だが、唯物論者でありパヴロフの弟子である私は、記憶をあくまでも言語機能として考える立場におり、身体記憶とか、原始の追憶とか、そう言った非科学的な考え方に組することはできず、したがって記憶の遺伝などを認めるわけにはいかなないから、ヘビに対する恐怖も樹上生活のなごりと断ずるには、かなりためらいを感じないわけにはいかなないのである。むしろ私は、そうした考えこそ、ヘビの不気味さに対する、通俗的な合理化だと思う。この考え方は、さらに極端になれば、数千万年前の、ハチュウ類に対する哺乳類の劣勢時代に理由を求める結果に

まで行きつくに相違ない。常識による思考の機械化というやつである。

という具合に考えてきたものの、こなすどころか、まさしくヘビ的文章の見本になり、このまま行けばますます混乱するのは必定である。気取りはよして、ズバリとヘビの本質にせまる、科学的方法を採用したほうが得策とくさくではないか。その方が多分私には似つかわしい……と、これまでの私の発想をふりかえってみると、なるほど私はすこし気取りすぎていた。ヘビの不気味さなどと言いながら、要するに私はヘビそのものについてはなるべくふれないようにして、ヘビという言葉を追いまわしてにすぎないのだ。しゃれつ気などというものは、つまり言葉の化粧である。一つ私はヘビそのものでズバリといつてやろう、とは言ってみたものの、今は午前三時、ヘビ屋に使いを出すわけにもいかず、さりとて動物園に出掛けてみるわけにもいかず、まあこれも口先だけのことになりそうだ。それくらいなら、ヘビなどというのはよして、むしろ不気味さの方だけを問題にしたらどんなものか。それが欠点だと言われても、私としては、書出した以上なんとしても納得みんとくのいく結論を得ないと気がすまぬ。ヘビから神秘のヴェールをはがしてしまいたい。

……タバコを二本、しばらく間をおいて、よしと私は独白どくはくする。私の目は狂っていないかった。不気味さそのものに肉迫しようとした私は間違っていないかった。ツアラ・トウ・ストラの家来のように、ヘビはたちまち知的な論理にさえなってしまった。不気味な恐怖とは生理学的に、神経の一種の失調だと考えられる。外界の感知と、それへの反応は、種々な段階の条件反射としてとらえられるが、もし非常に複雑な仕組で行われる必要がある場合、しかし対象の完全な把握あくができなかつたとしたら、その反射系にはたちまち恐るべき混乱をきたし、失調的反応を示すだろうことは想像に難かたくない。われわれ人間の場合、生活の高度な社会化によって、言語を媒介にする条件反射、すなわち意識生活が非常に広範こうはんになり、またその利用も極めて日常化し

ている。ここで常識の世界という、実はひどく複雑な仕組を、習慣によつて単純な略記号化した部分が、大きな構成部分をしめることになる。そこにもし、説明しつくせない対象が、しかも強制的に反応を強要するものとして現れた場合、常識反射系に混乱とこわばりが生じ、その生理的失調が、不気味さとして意識されるのは当然ではないか。ヘビは、われわれの生活圏にきわめて近く存在しながら、しかも神出鬼没しんしゅつきまぼつ、その生息はとらえがたく、その上アナロジをもとめにくい異常な形態によつて、われわれにそのような失調的混乱をおこさせる大きな必然性をもっている。このことが要するにヘビの神秘のすべてにちがいない。常識系の混乱そのものを常識にはめこむために、神話が生れ、プレ・ロジックが生れるのだ。

私は以上の結論に、はなはだ満足し、また確信をもつたのだが、科学的と言つた以上、証明の可能性について反問されることは、むろん覚悟の上である。あいにく手もとにヘビがないために、その証明の実験を報告できないことは残念だが、しかし論理的にその証明が成功するだろうことは保証する。ヘビ嫌いの人に、無理にヘビになれさせるのだ。体でヘビの一切を熟じゆく知させるのだ。ヘビの肉を食ひ、ヘビにさわり、ヘビを見つめ、日常不断にヘビと生活をともにさせるのだ。さらにヘビの動物学的研究に没頭せしめる。私自身、近い将来、極端にヘビ嫌いの友人に対して、この実験を行つてみたいと思つてゐるが、しかし経済的な理由で自信もてない。被験物としての友人に支払う金はかなりのものでなければならぬだろう。そこで、読者諸君の中に、それだけの経済的ゆとりと忍耐力のある方がいたら、ぜひためされることをおすすめしたい。かならずヘビの恐怖から解除され、猫に対すごとく、ヘビを愛撫あいぶする友人を発見するに相違ないのである。

……と、つい調子にのり、「ヘビ、ながすぎる」なんともう、まみのある文句ではないか。この一句でヘビはたちまち一箇の物体と化した。物体になりたがらないヘビを、常識系に入りこも

うとしないへびを、あつさり物体化してしまつた。これ以上、なにを言うことがあろうか。それに私は、いつさい気取らないことにきめたのだ。

と、ここで突然、私の思考は、リッチ・コールドーの『砂漠と闘う人々』に飛躍した。その飛躍を暗示したものが、へびの常識系への作用だつたのである。

常識系とは、生活の中で、もつとも保守的な部分と言うことができるだろう。それは完全に受動的な部分であり、比喩的に言えば、盲目の世界だ。外界は、記号としてしか存在しない。言葉は、外界を抽象して把握する道具としてではなく、盲人をまねく鈴の音にしかすぎなくなる。外界から命令をつたえてくる電話機だと考えてもいい。封建的な社会において、言語がとくに命令の道具として発達したことは、よく言われていることである。民衆は、暗黒の部屋の中で、電話による指令のままに、限られた行動をする以外になかつた。秩序とは、外界を虚無と考えることである。その受動性から生れる文化とは、要するに常識系の洗練と複雑化にほかならない。

常識系が砂漠を虚無として、せいぜいがキャラバン、オアシス、外人部隊の虚無として、あるいは聖アントワヌの苦悩、もしくは古代の廢墟としてしか考え得ないことは、説明するまでもないことだ。分りきつたことだが、意識は常識系の部屋に安住あんじゆうしていても、肉体はつねに外界にさらされているのが人間であり、電話の命令が肉体と外界の関係を調節しえなくなつて、肉体が意識に常識系の部屋を出ることを要求しはじめたとき、意識の革命がおこる。この革命性——本来人間にそなわつた機能——が進歩とよばれるのだ。そのとき人は、外界が虚無ではないことを発見し、それどころか無限に豊富な現実を見て、大きな、そして楽天的な戦慄せんりつに目を見開く。……『砂漠と闘う人々』の面白さは、そんな面白さだつた。外界を変革する対象として見ることで、虚無から創造する肯定的な明るさを知ることができる。いや、そんな文学的

な言いまわしはよそう。虚無などというものははじめから存在しなかつた。要するに常識系の壁にすぎなかつたのだ。変革者の目をもつて現実に立ちむかうとき、べつに謎めいた呪文などとなえなくても、常識系の壁は目覚時計に追われた夢のようにかき消えてしまうものである。

もつとも『砂漠と闘う人々』にも、不満がないではない。とくに、問題が政治的な障碍しょうがいにさしかかつたとき。もしその闘いを徹底してゆけば、当然その先に人間の砂漠につきあたらざるをえないはずではないか。自然の砂漠から、社会の砂漠に向うや、たちまち常識系に立ちもどるところは、いささか精神の砂漠を思わせる。この本のつづきは、多分その精神の砂漠と闘うことからはじめられなければなるまい。

ついでに、いつそ蛇足だそくもつけることにすれば……私は最近の平和論の弱点として、その常識性を痛感する。常識系は本来その性格として、保守的なものであり、たとえ人間が本来平和を愛するものであるにしても、それが常識的な平和論である限り、たちまち変質してしまうことは必至である。なぜなら平和論は常識系の上にこそ安定するものだから、平和に徹することは、同時に平和の砂漠性の認識に徹することでもあるのではあるまいか。さて、足もついたし、これでなんとかへび年を飾る文章ができたというものである。

——あるへび年に——

へびについて II

「へび、ながすぎる」などという、しゃれた文句が出てくるまえに、ふつうの人なら、まず嫌悪感が先に立ってしまう。それも、犬嫌いだとか、猫嫌いだとかいった程度のものではなく、極端な場合には、蛇の絵を見ただけでも、足がすくみ、胸が悪くなるというほどだ。さいわい

僕は、それほどの蛇嫌いではない。しかし、ムカデ、ゲジゲジの類に対しては、まさに感電的なショックを受けるほうなので、蛇恐怖症の心理についても、おおよその類推は可能なつもりである。

ところで、この蛇に対する生理的嫌悪感の正体は、いったい何なのか。蛇嫌いが、わり一般的なものであるにもかかわらず、その正体の究明は、意外になおざりにされたままである。まさか、蛇の魔性を信じるわけにもいかず、そうかと言って、気味が悪いから、気味が悪い、では匙を投げたも同然だ。ただ、一つだけ、世に流布している説明のうちで、一見いかにも合理的な外形をそなえているのは、人類の太古の記憶だという例の学説である。人類の祖先がかつて、樹上生活をしていた時代、蛇は人類にとつての、もつとも恐るべき敵であった。その時代の記憶が、遺伝して、意識の底に眠っているのだという、一応進化論的な裏付けさえ与えられている。

*

だが、この学説も、よく考えてみるとすこぶる疑わしいことだらけだ。

まず第一に、人類の祖先が、はたして樹上生活をしていたかどうか。むしろ、地上におり立つことで、彼等は猿から離れ、人類の祖先たりえたのではなかったのか。だとすれば、人類の天敵は、むしろ肉食の四足獣だったはずである。しかし人間は、猛獣に恐怖こそいだけ、蛇に對するような嫌悪感をいだきはしない。これはあきらかに矛盾である。

疑問の第二は、記憶の遺伝という考え方である。後天的に得た形質が遺伝するという学説も、ないではないが、しかし記憶が遺伝するという説はまだ聞いたことがない。もし、そんなことが可能だとすれば、前も書いたように、社会の進歩とともに、初等教育などは不要になり、七

歳から中学校に入学というようになことにだつて、なりかねまい。ともかく、記憶の遺伝説が信じられるほどの、楽天的な事態は、世界のどこにもまだ発生していないというのが、動かしがたい現実なのである。

と言つたわけで、このせつかくの学説も、残念ながら、あまり信ずるには足らないものようである。そこで私は考えてみた。考えぬいたあげくに思いついたのが、心理アレルギー説だ。人間は、皮膚呼吸に多くを負っているので、ぬめぬめした感覚には、生理的な嫌悪を感じるものである。つまり、蛇の肌がついている、あのぬめぬめの感触こそ、不快の正体だったのであるまいか。

ところが、実際には、蛇の肌はけつしてぬめぬめなどしてはいないのである。むしろざらついていると言つたほうが、より正確だ。ぬめぬめというなら、むしろ魚のほうである。しかし、例えば、金魚を見て、足がすくむなどという人間は、一人人に一人だつてはいはすまい。どうやらこのアレルギー説も、いさぎよく引込めたほうがよさそうだ。

*

さて、そうすると、他にはどんな理由がありうるか。僕は、動物図鑑の、蛇の写真をながめながら、つくづくと首をひねつて考えたものである。手足がなくて、ただ長いもの……角が生えているとか、牙をむき出しているとか、尋常ならざる誇張によって、相手をおびやかしているのとは反対に……むしろ、これは、当然あるべきものの欠如からくる、違和感であるらしい。

そこで、なるほど、と思ひ当つたものである。欠如が与える不安と言えば、これはどうやら、幽霊が与える恐怖と同質のものであるらしい。幽霊の特徴をひと口に言えば、生との断絶、すなわち、日常性の欠如ということである。幽霊は、誰かの前に出現することによって、はじめて存在を許されるのだ。まだ出て来ていない幽霊などというものは、幽霊でさえありえない。

どんな怪談をみても、出現する以前の、幽霊の日常生活についてふれたりした例はないのである。あつたとしても、それはせいぜい、喜劇か、漫画の中でだけのことであろう。

その点、繰返すようだが、蛇の場合も、すこぶる事情が似通っている。手足のない蛇は、せまい穴の中から、とつぜん現れる。事実としても、とつぜんだろうが、心理的には、もつとつぜんなのだ。同じく手足をもつた、犬猫などとはちがつて、ただのつぺりと胴体ばかりの蛇というやつは、なにぶん擬人化ぎじんかがひどく困難だ。つまり、内側からその日常生活を想像することが、ほとんど不可能にちかひのである。そこであたかも、幽霊のように、日常のない虚無の中から、突如とつじょ出現したような印象を与えることになる。

この、擬人化がむつかしいという点では、逆に手足が多すぎる、ムカデや、ゲジゲジなどの場合も同じことだろう。いずれにしても、その日常を想像しえないということは、ひどく不気味なことなのである。どんなに恐るべき猛獣でも、その日常を類推しうるかぎり、それは心理的に征服可能なものとなつてしまふのだ。

*

つまり、人間というやつは、それほど強く日常性の壁にしがついている動物だとも言えるわけである。たしかに、昨日のように、今日があり、明日があるという、日常感に支えられていればこそ、社会や秩序を、実在として受けとめることも出来るわけだが、しかし、その壁にあまりよしかかつてばかりいすぎると、こんどは日常の外にあるものが、すべて幽霊や蛇に見えてくるという、きわめて偏狭へんきょうな視野しやの持主になつてしまふ危険もあるわけだ。

なにも日常性を否定することはない。しかし、たまには日常の外の外の空気を吸つてみるのも、精神の健康のためには必然なことではあるまいか。現に、蛇と日常を共にしている、蛇つかいは、蛇に対してなんらの嫌悪も感じないという。そして、このことは、かならずしも実際の蛇

だけにかぎったことではなく、政治的な蛇、思想的な蛇、文化的な蛇、その他さまざまな蛇についても、同様にあてはまることなどではあるまいか。

どんな蛇にだって、思い切つて近づいて行つてみれば、かならずそれなりの日常というものはあるはずなのである。蛇に親しんだからといって、かならずしも蛇に吞まれるとはかぎらないのである。

くビについて III

旧い経験主義的医術では、病氣をたとえば、腹痛であるとか目まいであるとか発熱であるとかいうふうに、症状だけで分類していた。しかし人体についての科学が発達してきた現代では、そういう分類はしない。たとえば同じ腹痛でも単純な大腸カタルがありインフルエンザがあり神経性のものである。逆に同じインフルエンザでも腹痛下痢型があり気管支炎型があり高熱頭痛型があるというわけだ。

しかしまだ十分科学的なメスがとどいていない精神病理学の世界では、旧い医術的な現象分類がいぜんとしておこなわれている。神経病理学の発達で比較的ぜせい是正されたとはいふものの、霊と肉との間をつなぐ生理学的機構の本態は、いぜんとして謎なぞにつつまれたままだ。むしろその謎に対する挑戦ちうせんとして、パヴロフの条件反射理論がある。しかしパヴロフの理論はまだ日本では一般的に通用するところまではいっていない。科学的偏見が大きな障害になっているのである。

これはとくに精神病理の分野が非科学的だというのではなく、むしろ現代医学の方法的弱点が、この分野で集中的に表現されたとしたほうがよいだろう。つまり、一般生理学の方法を精

神科学の領域に機械的に適用したために、ゆがみが拡大され、それが結果として医術的退行現象をひきおこしたものだと思う。パヴロフの方法は、したがって、それだけに抵抗も大きかったわけだ。——機械的唯物論の、弁証法的唯物論に対する偏見の一例である。

「偏見」についての考え方のうえにも、同様の偏見が存在している。「偏見」を個々の現象で、動物園の戸籍簿こせきぼかなんぞのように、凶解分類するやり方だ。人種的偏見、国家的偏見、宗教的偏見、階級的偏見、個人的偏見、集団的偏見、性的偏見、云々……むろんこうした偏見が、腹痛や頭痛の発熱のように、事実として存在することも否定できない。しかしこうした分類だけで、はたして正しい投薬とうやくが可能だろうか？

私はこうした機械的な偏見分類に反対したい。ここから出てくるものは単に、偏見に対する正見という常識論だけなのだ。善玉悪玉ぜんぎあくぎょくの通俗小説がなら現実発見の武器になりえないように、偏見正見の機械的対立は、ただ新しい偏見をうえつけるのに役立つだけの話である。（「偏見にたいする偏見」の形成）

事実、思想的偏見を代表する保守思想は、その大部分がこの種の「偏見に対する偏見」で自分を合理化しているのである。

偏見が形成されるプロセスを分析して、その本質をとらえなければならぬと思う。

昔はヒステリーを、悪鬼につかれたのだと考えていた。（事実ヒステリー患者は棒でなぐったりすると、一時的に治ることがある。鬼がついていたのを、なぐって追い出したのだという、経験的説明も成立ったわけだ）次の時代には、一種の軽い精神病だと考えるようになった。（器質的原因が分らないから、これを心因性神経症と名づけた）さらに現在では、病気よりもむしろ人間の精神現象の一つの状態だと考える考え方が強くなってきている。精神についての善玉悪

玉主義だまがやつとのりこえられはじめられたわけだ。(精神分析派の功績は見落すことができない。しかし、この考え方をさらに科学的にするためには、やはり条件反射理論の出現が必要だったのである)

偏見についても、正見と偏見といったような機械的対立を早く克服こくふくして、人間の認識活動の一状態としてとらえる方法が確立されなければならないと思うわけである。健康優良児などというのは、エセ合理主義が思いついたもつとも馬鹿気た健康観の一つだが、同じような錯誤が認識の理解の上にも存在しているのである。健康優良児的な正しい認識の幻想が、保守的教育理論の正当性の裏づけになっているのだし、同時に進歩的な教育理論を、卑俗ひぞくな啓蒙主義けいもうの泥沼にとじこめる原因にもなっているのだと思う。

偏見はヒステリーと同じく、病気であるよりもむしろ状態なのである。古い認識が新しい現実げんじつに接し、その現実を正しくとらえることができず、古い認識をそのままアナロジカルに押しひろげて、現実をゆがめてしまう、というごく一般的な認識操作のひずみにすぎないのである。しかしこのひずみなしには、新しい現実との衝突しょうとつも闘いもないのであり、したがって新しい認識の可能性もまたないことになる。

だからといって、偏見を正常化しようと言っているわけではない。そのひずみが微小であったり、また現実との衝突をおこさないような場合、誰もそういうものをとくに偏見とはよばない。偏見というのはそのひずみが蓄積ちくせきされ、現実との衝突が目立ってきたときに、はじめてつけられる名前である。微量なら薬だが、大量になれば「毒薬」の黒いレッテルが貼はられるというわけだ。偏見にはたしかに毒薬の要素がある。

要素はあるが、しかし偏見即毒薬と言いきってしまうこともできないのだ。ひずみが蓄積さ

れて出来たエネルギーは、一方ではおそるべき思想の停滞、認識のステロタイプをうみだすが、同時に認識革命の原動力にもなるのである。作用と反作用は、切り離してばらばらに存在させることはできないのである。

つまり偏見の克服とは、偏見をただむやみに否定することではなく、その正体を明るみにだし、正見との関係を法的に把握して、その衝突からおこるエネルギーを制御し有効に利用することではなければならないのである。

前にも書いたことだが、たとえばわれわれはヘビやゲジゲジに不快感をもつ。なぜかという（通俗合理主義者がよくいうように、人間の原始時代の記憶の遺伝などではなく）ヘビには足がなく、ゲジゲジには足が沢山ありすぎるといふ、単純な理由のためだ。足がぜんぜんなかったり、逆にあまり多すぎたりすると、人間生活からの類推が困難である。人間にはヘビやゲジゲジの生活を、自分自身の内的事件として想像し再現することができない。つまり犬や馬に對するように、簡単な擬人化ができないわけだ。そこで慣性的な情緒の拒絶反応がおこる。

しかし、ヘビの生活を内側から捉えているヘビ使いには、そのような情緒反応はおこらない。昆虫学者は、ゲジゲジをみて、毛を逆立てるようなことはしない。（私はゲジゲジを見ると体がすくむ）

ヘビに対する恐怖や不快感を、むしろ偏見とよぶことはできない。しかしそれは、ヘビがつまらない動物であつて、思想や論理でないからという理由からではないのだ。もしヘビの粉末がインフルエンザに卓効を示すような場合、ヘビはいやだからというので、PTAがこぞつてヘビ粉服用反対運動をおこしたとなると、これはもう明らかに偏見といふべきであろう。たとえばいまのペニシリンやピリン剤恐怖症など（私も少々かかっているが）そうした偏見の要素がある。偏見の実体はいつも案外情緒的なものだ。人種の偏見が、しばしば嗅覚とつよく

結びついていることを思い出していたきたい。(嗅覚中枢と情緒形成の関係は、現代心理学のもつとも大きな興味の焦点の一つである)

むろん偏見はつねに一応の理窟をもっている。しかしそれは要するに情緒が自己防衛のためにふりかざしたやくざな棍棒こんぼうにすぎないのだ。おそろしいのはその棍棒自体よりも、むしろ棍棒をふりかざそうとする内的衝動なのである。啓蒙主義者は棍棒をとりあげることばかり考えているが、真にとりあげるべきものは偏見の内部の情緒的混迷こんめいなのである。ヘビ恐怖症の療法はまずヘビに馴なれさせることであろう。ヘビに馴れさせるためには、むりやりにヘビと一緒に檻おりの中にとじこめるのがよろしい。同時に、無痛分娩の場合のように、ヘビに対する生物学的知識を十分にあたえることもむろん必要であろうが……(情緒を通じて人種的偏見が弱まった例として、戦後の外国映画の輸入の効用は無視できない。論理よりも情緒的接触が偏見解除に役立つのである。映画の教育的効用は、その内容よりむしろ記録性にあるはずだ。この点でもソヴェト映画理論は大きな誤ちをおかしたと思う)

偏見とは要するに、情緒のステロタイプが、新しい認識に対しておこすアレルギー反応だといふことができる。私はとくに日本人が独特なアレルギー性体質の持主だとは思っていない。日本人の社会生活の閉鎖性へいさせいが、アニメイズムからの脱却だつぎやくを不完全なものにし、まだ多くのゆがみを残しているにしても、そのためにかえって偏見の度合は弱いのではないかとさえ考えている。たとえばアフリカの未開土着人の思考形式を偏見と呼んでいいものだろうか。むろん日本人は未開人とはちがう。しかし、未開人の思考を偏見とは言えないような意味で、日本人も偏見とはよべないような思考のゆがみをもっているように思うのだ。言いかえれば、近代的な思考あるいは感情と、十分に対応できないような次元のちがった要素があるような気がするのである。たとえば戦時中のナチスの排外民族感情はいがいは、近代国家感情の確立、つまり封建的蓄積を否定克

服した上につくられた、まさに近代的な意味での民族偏見というべきものだ。明確なヒューマニズムに対する反対物である。しかし日本人の排外思想は、まだ多分に藩閥はんぼく的なものであり、その人工的モザイクであったから、根底は意外にもろく、戦後は容易に崩れ去った。明確な対立物をもたぬ模造偏見もぞうのもろさである。

むろんこれは相対的なもので、日本人にぜんぜん偏見がないというわけではないが、すくなくとも稀薄きはくだということは言えると思う。たとえば農村での保守党支持という現象も、べつに保守的政見が支持されているわけではなく、むしろ無政見が支持されていると見るべきではあるまいか。つまり偏見にしろ正見にしろ、もともと見などありはしないのだ。そこで保守主義者は、この無見状態を組織するために、偏見に対する偏見、つまり一切の見はすべて偏見なのだという考えを普及ふきゅうさせようとする。良識的インテリゲンチアまでがその尻馬しうまにのって、日和見主義を標榜ひょうぼうするわけだ。

ヨーロッパ人は偏見がすくなく、日本人は偏見がつよいという、これまでの知識人の通念は、近代思想に対するいかにも日本人らしい誤解だと思う。明確に対立物を意識している（せざるをえない）ヨーロッパ人の方が、偏見に対する抵抗がはげしいと同時に、偏見の度合もまたはるかに強いのだ。そしてこの対立のエネルギーこそ、動的認識の原動力にほかならない。

日本人の偏見は微温的である。だからあえて特徴づければ、偏見に対する偏見こそもつとも日本的な偏見だと言つてよいのではあるまいか。

シェクレイの空想科学小説に『体形』というのがあり、身体の形が不定でどんな形にでもなれるグロム人というのが登場してくるが、偏見の実体も要するにこのグロム人のようなものではないかと思う。それは認識活動にともなう一つの傾向性であり、外部の条件によつていかなる形体にでもなりうるので、当然政治は偏見の組織化を考える。組織された偏見は、一定の傾

向をもつと同時に、力もあたえられる。しかしこの場合、闘わなければならないのは、偏見自体よりむしろ背後にある政治でなければならぬのだ。偏見が政治をつくるのではなく、政治が偏見に形体を与えるのである。グロム人の地球攻略がついに失敗におわつたのは、彼らが地球上の生命の体形の多様性に眩惑げんわくされて、政治の要請ようせいから離脱りだつしたためだった。

しかし「偏見に対する偏見」にとらわれている日本人はとかくこの原則を逆に考えがちである。日本の政治家の無能は、その偏見のせいだというのである。つまり政治によって、そのような体形の偏見に組織されてしまっているわけだ。そして対立物の稀薄な偏見は、なかなかそこから脱け出すことがむづかしい。

だから私は、やや逆説めくが、むしろ偏見を愛する精神をこそ強調したいと思うわけである。「偏見に対する偏見」というあいまいな状態を否定して、偏見と正見の衝突がひきおこすエネルギーをとりだそうと思えば、偏見にせつせと肥料をやり水をかけて育成することだって必要なのではあるまいか。偏見の成長とは、対立物を自覚するということである。政治の強制をうけないかぎり、成長しきつた偏見は自壊して正見に転化するにちがいない。へんな啓蒙心から正見なるものを教えこんだりするよりも、対立物との衝突からエネルギーをつくり出すほうがはるかに革命的なやり方なのだ。偏見の善玉ぜんたま悪玉あくだま主義は、ただ退化現象をうながすだけのことだろう。大事なのは正見の勝利でなく、正見と偏見の衝突がひきおこす、認識の活性化なのだから。

(蛇足の蛇足)

二度にわたって書いた、私の「ヘビ恐怖症治療法」は、しかしその後、鶴見俊輔君によって、あえなく否定されてしまった。彼によれば、「シュウトメは、同じオリの中にとじこめられてい

ながらヨメにたいして偏見をもちつづけるであろう。別居するほうが、おたがいにたいする偏見から自由になれる場合もあるのだし、また日本人にたいする人種的偏見はアメリカ東部においてはうすく、カリフォルニア州においては、白人労働者が日本人の労働者を競争相手としていたために強い」というのだ。たしかに、現象としては、そういう一面もあると思う。しかし、それではまるで、妊婦に無痛分娩の教育をするより、まず子供を生ませるなど言っているようなものではないか。それに私は、鶴見君の見解に反する、事実としてのデータも知っている。それはアメリカ陸軍の、白人と黒人の偏見についての研究である。黒人を、特殊部隊に編成しておくより、混成部隊をつくったほうが、はるかに相互の偏見が弱まり、能率が上ったというのだ。さて、一体、どちらが正しいのだろうか？

海が塩からいからといって、塩からいものが海だとはかぎらない。とにかく、比喩による比較は危険である。なにはともあれ、実証にしくものはないのだ。偏見論の精密化のためにも、誰か、名乗り出る実験希望者はいませんか？